

九州大学総合研究 博物館ニュース

October 2007 No.9

全国大学博物館等協議会2007年大会九州大学で開催

多田内修



平成19年6月7、8の両日、九州大学が主管校となった第10回全国大学博物館等協議会・第2回博物科学会が、箱崎キャンパスの五十周年記念講堂及び21世紀交流プラザを会場として開催された。参加者は、北は北海道大学総合博物館から、南は琉球大学資料館まで全国の大学博物館、同設置準備委員会、国立博物館のほか、博物館関係の業者を含めた31団体の教員、学芸員、事務職員など74名であった。

6月7日は、多田内修大会実行委員長、梶山千里九州大学総長の歓迎の挨拶のあと、馬渡駿輔協議会会長が大学博物館等協議会の役割について基調講演を行い、久保庭信一日本博物館協会専務理事の挨拶では博物館協会への大学博物館の参加が呼びかけられた。国立科学博物館標本資料センター松浦啓一コレクションディレクターによる特別講演「GBIFと日本の自然史系博物館：標本資料データベースから何が展望できるか」に続いて、第1日目の博物科学会一般講演が行われ、情報、教育・マネジメントに関する8題が発表された。

6月8日は、前日に続いて教育・マネジメント、地域・社会貢献、学術に関する12題の研究発表が行われ、質疑・応答が繰り広げられた。一般講演終了後、館長会議、実務者会議、協議会総会が行われた。館長会議では、平成18年度決算案及び19年度予算案を承認し、次期役員案及び平成20年度大会主管校案を決め、総会に諮ることとした後、博物館法改正問題等博物館をめぐる最近の動きについて議論した。実務者会

議では、平成18年度合同企画展の総括と今後の企画（橋本博文新潟大学旭町学術資料展示館、岩永省三九州大学総合研究博物館、薩摩雅登東京芸術大学美術館）、大学博物館でのボランティア制度の導入（大木公彦鹿児島大学総合研究博物館）、博物館教育への組織的取り組み（湯浅万紀子北海道大学総合博物館）、博物科学会規則案（松枝大治北海道大学総合博物館）等を議論した。総会では（1）平成18年度決算及び19年度予算を承認した後、（2）次期役員として、会長校—東北大学総合学術博物館（永廣昌之館長）、副会長校—九州大学総合研究博物館（多田内修館長）、監査校—東京大学総合研究博物館（林良博館長）を決め、（3）平成20年度大学博物館等協議会及び第3回博物科学会を大阪大学が主管校となって来年6月開催すること、（4）平成18年度の合同企画展の成功を受けて、今後も東京芸術大学美術館を核として共同企画を計画すること、などを決めて散会した。

協議会期間中には、大学博物館の骨格標本室（旧工学部知能機械工場2階）および工学部列品室（工学部本館3階）が参加者に解放され、博物館職員が展示室のみならず標本収蔵室まで案内し、説明した。見学者は、収蔵標本はもとより、収蔵方法、収蔵展示の問題点などを質問しながら見て回った。

（大学博物館等協議会2007年大会実行委員長・九州大学総合研究博物館館長）



参加者による各博物館の紹介



化石展解説風景

私どもが例年夏に行っている公開展示は、昨年度の「海と空ののりもの展」から、福岡市少年科学文化会館（以下少文）との合同企画展という形になっています。昨年度は、開催期間の前半が少文、後半が九大博という「開催期間の住み分け」をしました。しかし今年度は、まったくの同時期開催、会場も同じ、という完全共催でした。準備は試行錯誤の連続でしたが、結論からいうと、合同企画展は大成功。入場者数も40日間の会期で2万人を越え、九大博の公開展示史上最高となりました。

今回は、展示企画の早いうちから、少文側の担当者である泊さんから「できれば恐竜展で」「アイキャッチャーとして、入り口すぐのところに、トリケラトプスのレプリカがど〜んとおいてある」という要望を頂いておりました。ところが困ったことに、九大には、化石を材料に研究している先生方はおられないものの、恐竜を扱っている研究室はありません。なにはともあれ、博物館の松隈先生（古生物が専門）をとおして、化石を研究材料にしている6名の地学関係の先生方に実行委員をお願いし、実行委員長には、理学研究院の佐野先生になっていただきました。この実行委員会での何回かの会議を経て、九大側は、恐竜化石ではなく、普通イメージする「化石」とはひとあじ違う化石（生痕化石や微化石など）も用いつつ、化石を調べることでわかる地球の歴史や環境を紹介する内容にしよう、ということになりました。

今回の成功の秘訣は、まさにコラボレーション。会場手前側の約三分の一のエリアで「わくわくドキドキ」部分を少文が、残りのエリアで「化石のヒミツ」と「化石が語る地球の環境」部分を九大が担当した形です。小さいお子さんに大好評の「クラフトコーナー」は、少文の方々や学生アルバイトの方々とも協力して造りあげ、また展示業者さんの機転で、手作

りの木製パズルも3台常設しました。小さな子供たちは、トリケラトプスに歓声を上げ、さわられる化石や模型、のぞける顕微鏡をひとつとおりみたら、あとはクラフトコーナーにまっしぐらです。一方、同伴の大人の方は、子供たちがクラフトコーナーで楽しんでいる間、ちらちらと展示パネルを読んで下さいます。もちろん、パネルをじっくり読んで、展示物を見て回ってくださるご家族や大人の来場者もいらっしゃり、展示内容についてもご好評をいただきました。今回は、九大側と少文側の、それぞれ得意なところを持ちよってできあがった非常によい展示となり、理想の展示に一步近づいたと思っています。

もちろん、まだまだ改善の余地はあります。九大博では、来場された皆様からいただいたアンケート回答などを参考に、今後の企画内容をより充実させていきたいと考えています。また、電話やメール、投書などでもご意見・ご要望を受け付けておりますので、是非皆様のお声をお寄せ下さい。

今回の企画展では、九大からの標本や模型と、他機関からの借用標本とを合わせ、約140点あまりの展示となりました。少文エリアの標本は全て東京都にある（財）進化学研究所からお借りました。また九大エリアのうち、御船コーナーについては、熊本県の御船町恐竜博物館から、秋吉台コーナーの一部については、山口県の秋吉台科学博物館から、標本をそれぞれお借りました。最後になりましたが、標本をお貸し下さったこれら博物館関係機関の皆様にご礼申し上げますとともに、ご来場下さった皆様に深く感謝いたします。

来年度の公開展示は、少文との合同企画展をお休みし、九大埋蔵文化財研究室からの標本を中心とした考古展を、九州国立博物館内にて開催する予定です。どうぞご期待ください。

（総合研究博物館 開示研究系・分析技術開発系）



大人気だった化石展クラフトコーナー

P&P(教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト)とは、九州大学として、一定の期間研究費等の重点配分を行い、本学の教育と研究の一層の発展を図ることを目的とするものです。今年度博物館からは、「九州大学博物館展示を利用した実践的研究～アウトリーチ活動のあり方と、大人と子どもの関わりを促すツール開発～」(代表・三島美佐子)が、Bタイプ-2(学術文化の総合的な振興を目的とした、人文・社会及び基礎科学の研究に対する配分)で採択されました。この研究では、九州大学総合研究博物館の標本室公開や公開展示を、子どもを含めた学内外の利用者がよりよく活用できるようにするための、現場にフィードバックできる実践研究を行うことを目的としています。具体的には、来場者調査、展示補助ツールの開発、博物館関連のセミナー開催、インクルーシブな場の試作などです。以下にこれまでの活動を、簡単にご紹介いたします。なお、合同展示の際、アンケートにご協力下さった皆様、受付を手伝ってくださった皆様、どうもありがとうございました。この場をかりて御礼申し上げます。

○来場者調査

・合同企画展期間中、3日間にわたり、来場者の行動調査を行いました。

この調査で、来場者のほとんどが、展示コーナーで立ち止まる時間が5秒以内、展示見学にかかる時間は10分前後と非常に短いということがわかりました。

・合同企画展に補助ツール導入後、利用者のアンケート調査を行いました。

未就学児の親子にとっては「難しい」という意見が多く、一方小学生以上では「楽しめた」という意見が多くありました。現在これらのアンケートを解析し、よりよい補助ツールのフォーマットを検討中です。

○展示補助ツールの開発

・合同企画展期間中、大人が問題を出し子どもが答えるクイズ形式の展示補助ツール「親子 de クエスチョン」を作成。8月24日～8月30日にかけて、会場にて実施いたしました(写真)。ツールの問題原案とフォーマットは九州大学ユーザーサイエンス機構の清水麻記さん、ツールデザインは久留米工業大学の河野先生が作成し、とてもかわいらしいものになりました。問題については、実行委員長の佐野先生と三島が監修しましたが、もうすこし時間をかけ、パネル作成者の先生方と一緒に練る必要があると考えています。実際の会場では、クイズ形式であったこともあり、予想以上に人気がありました。

うれしいハプニングは、今回の合同展示にほとんど毎日足げく通っていたリピーターの小学生の皆さんが、担当者不在のときに、補助ツール受付の作業を手伝ってくれたことです。このような自主的な動きが生まれることは、博物館のような「場」が持つ、よい効果のひとつとみています。



○セミナー

第0回目(プレセミナー)

日時：2007年5月22日(火)18:30～19:30
場所：箱崎キャンパス旧工学部本館2階207号室

- ・「研究計画について」
三島美佐子(総合研究博物館)
- ・「江戸のモノづくりに見るアウトリーチ活動」
中西 哲也(総合研究博物館)
- ・「全米チルドレンズミュージアム学会及び全米博物館協会2007の報告」
清水 麻記(USI子どもプロジェクト)

第1回目

日時：2007年7月6日(金)18:30～21:00
場所：箱崎キャンパス21世紀交流プラザセミナー室

- ・「みんなの「夢」を「かたち」にするには」
松永 久(三菱総合研究所/地域経営研究センター 主任研究員)
- ・「「夢」が「かたち」になったら エducーターの出番!」
太田 歩(国立歴史民俗博物館/広報サービス室 研究支援推進員)

第2回目

日時：2007年8月31日(金)17:00～20:00
場所：旧工学部本館2階207号室 USIセミナー室

- ・「くるしまぎれの陳列棚—コミュニケーションをデザインすること—」
木村 政司(日本大学芸術学部デザイン学科 教授)
- ・「自然史博物館とサイエンスコミュニケーション」
渡辺 政隆(文部科学省科学技術政策研究所 上席研究官)

(総合研究博物館 開示研究系)





図1. ウメノキゴケの仲間。福岡県宗像市 2007.1



図2. サルオガセの仲間。群馬県みなかみ町 2007.5



図3. ウメノキゴケを細かく刻み、薄めたアンモニア水を加えた直後。

地衣類という生物をご存じですか？名前は知らなくとも目にしたことはあるのではないのでしょうか（図 1, 2）。樹皮や岩の上など地衣類は私たちの身近に、花のように愛されることもなく、雑草のように嫌われることもなく、地味に生育しています。地衣類は、菌類と藻類という本来異なる分類群の生物が、共同体を作り、あたかも一つの生物のようにわかちがたく生きています。そんな不思議な生き方を観察するだけでも魅力的なのですが、さらに、地衣類が羊毛や絹の染色に用いられていると知ったとき、その魅力にますます引き付けられてしまいました。

地衣類による染色は、美しい赤紫が染められることから、ギリシャ、地中海地方で紀元前から、高価な貝紫の下染めや代替物として重用されていました。また、ブリテン諸島、北欧諸国では、現在でも伝統工芸として地衣染めが継承されて、茶色や黄色などの色を染めるのにも使われています。ところで、赤紫色に関しては、草木染めのように地衣類を水で煮出すだけでは、その色を引き出すことはできません。地衣類の中に含まれる地衣成分が、アンモニアの存在下で空気に触れ酸化されて、初めて、赤紫の色素に変化します。地衣成分は、地衣類が生活する中で生成した各種の二次代謝産物で、菌類・藻類単独では合成されない地衣独特の物質です。アンモニアには腐らせた羊の尿などを用いたそうです。赤紫色を得る材料は、当時の生活の中にそろっていました。けれど、衣食住に関わる全ての仕事は労苦が多く時間も取られた手仕事の時代です。生活の中で、染色の技術として確立させていくことは簡単ではなかったと思います。

地衣類からの赤紫色は、日本に生育しているウメノキゴケの仲間からも、得られるそうなので、百聞は一見にしかずと、文献をもとにやってみました（図 3, 4, 5）。材料を仕込んで1ヶ月、染めと乾燥に1日、染めあがった羊毛を目にしたときは心が躍りました。



図4. 約1ヶ月後、液は深い赤紫色に変化した。アンモニア臭はこの時点では消えている。



図5. ウメノキゴケで染めた羊毛。染め時間やPHを変えて色味を変化させることもできる。

参考文献

- エセル・メレ著、寺村祐子訳・著（2004）「植物染色」慶應義塾大学出版会、東京。
- 黒川道（1970）「地衣染め—地衣類の利用法の一つ—」自然科学と博物館 37: 14-18, 28.
- 重松聖二（2006）「植物色素のpHによる色の変化」愛媛県総合教育センター研究紀要 73: 39-42.
- 寺村祐子（1992）「ウールの植物染色」文化出版局、東京。（実際に地衣で染めてみたい方には、この本がおすすめです。）
- 寺村祐子（1982）「地衣類染色法」ライケン5(1): 2-4.

（総合研究博物館 研究支援推進員）

2004年10月、福岡市東区唐原5丁目の秋月定良、シズカ夫妻から福岡市東区にも地中海沿岸原産の外来貝類オオクビキレガイが生息していることを教えられてから丸5年が経つ。この間、朝日新聞、西日本新聞、紀伊民報など各種新聞、NHKなどのテレビでオオクビキレガイの侵入が報じられ、博物館のホームページに情報提供を呼びかけるチラシを掲載したために、これまでに300件余りの情報が寄せられた。ここで一度、これまでに分かったことを整理してみる。

(1) 分布について

これまでにオオクビキレガイの分布が確認された県は次の通りである。和歌山県を除くと、北九州市を中心とした半径100kmの円内にほぼ収まり、大部分の分布地は半径50km以内である。このことは、オオクビキレガイがまず北九州市に侵入してから、徐々に周辺に拡散していったことを暗示している。

和歌山県：田辺市

山口県：下関市、宇部市、山口市、周南市

大分県：宇佐市、中津市

福岡県：北九州市、京都郡（苅田町）、行橋市、築上郡（築城町、椎田町）、豊前市、中間市、直方市、田川市、田川郡、遠賀郡（岡垣町、水巻町）、宗像市、福津市、古賀市、糟屋郡（新宮町、志免町）、福岡市（東区、博多区、南区、早良区、西区）、太宰府市、筑紫野市、筑紫郡（那珂川町）、三潞郡（大木町）

佐賀県：小城市

熊本県：荒尾市

(2) 拡散の方法

アメリカでの研究によれば、オオクビキレガイが自力で拡散するスピードは、1年で33m～80mと見積もられている。福岡県では16年でおおよそ50kmほど分布域が広がったことから、拡散速度は1年で約3kmとなり、自力による拡散の40～100倍のスピードとなる。このことは、福岡県での拡散が、自力ではなく、他力であることを示唆している。

引越による拡散：宗像市、行橋市などの丘陵を切り開いて作られた新しい住宅地でのオオクビキレガイの発見は、北九州市からの転居に伴って、植木や鉢植えの植物と共に移動してきた可能性を示している。

土付きの植物のやりとりによる拡散：三潞郡大木町のお宅では北九州の親族宅から

植木を移植した。既にオオクビキレガイが繁殖している地域から、植木や、野菜苗、花苗などを運んできた時、土に卵や幼貝、成貝が混じっていた可能性がある。イギリスやアメリカ合衆国の非汚染地の園芸店でオオクビキレガイが発見された報告があり、植物苗と共に移動することは、世界中で広く起こっていると考えられる。

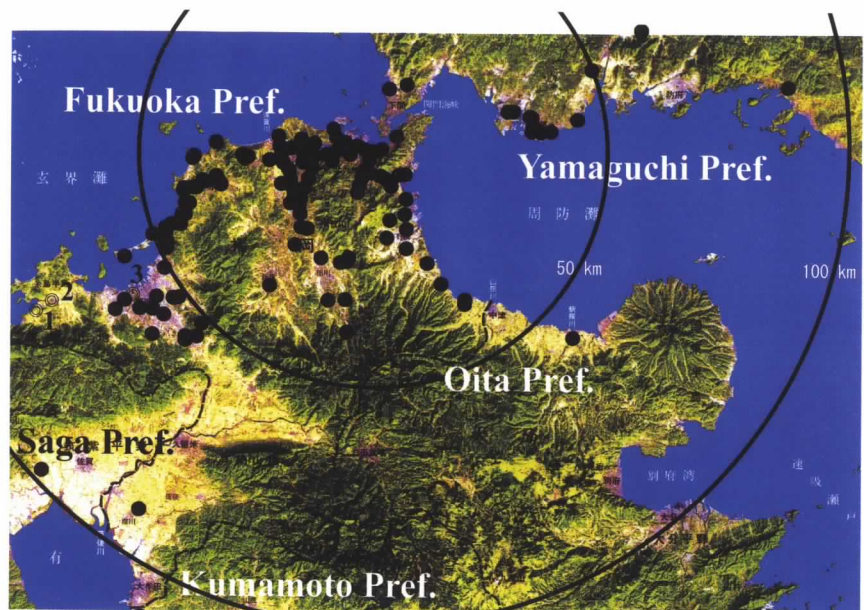
客土による拡散：志免町、福岡市南区花畑では、水田や斜面を客土によって畑とした所に分布が見られる。また、荒尾市では、北九州市方面まで活動範囲であった外構工事会社の敷地内でオオクビキレガイが発見された。工事の際出た土を荒尾市まで運んできたことが考えられる。

意図的拡散：北九州市から沖縄県那覇市へ、オオクビキレガイ成貝100個体が研究用として販売された。研究施設から外へ逃げ出すことがないように、慎重に管理する必要がある。

(3) 外来種の問題点

オオクビキレガイは、約20年前に我が国に侵入して、近年急速に密度を増した外来生物である。まだ不明な点が多いが、予想される問題点を考えてみる。

農作物の食害：地中海沿岸やアメリカ合衆国では、オオクビキレガイは「あまり深刻でない害虫」とされている。福岡県では、ここ数年、オオクビキレガイが大繁殖し、野菜や花を食害している。特に、種を蒔いて苗を作る農家では、芽生え直後の若い苗が一晩で食べられてしまうなど、深刻な被害が出ている。我が国の高温多湿の気候は、オオクビキレガイの夏眠期間を短くし、近年の地球温暖化で冬眠も余り起こらないと活動期間が長くなり、地中海沿岸地域やアメリカ合衆国と異なる



オオクビキレガイの西日本の分布。
1：活動を飼育槽で観察した場所。2：アメダス観測地点3：福岡管区気象台。



北九州市小倉南区新道寺、平成19年。



ブロッコリー苗や落ちたイチジクを食べる。福岡市南区花畑、平成19年9月。



り、「深刻な害虫」となる可能性がある。

不快害虫: ナメクジやマイマイの嫌いな人にとっては、オオクビキレガイは嫌な動物だといわれる。個体密度が余り高くない場合、芽生えの時を除けば、食害も余り深刻ではないので、我々は貝との共生を計るべきではないだろうか。

生態系の攪乱: オオクビキレガイは雑食性であり、他の陸貝を食べることが知られている。島など隔離された場所に侵入した場合、在来の生態系を破壊することが考えられるので、注意を要する。

寄生虫: スペインで吸虫の寄生が報告されている。人間に害がある寄生虫の宿主とならないか、我が国でも調査する必要がある。

(4) オオクビキレガイの駆除

北九州市総合農事センターでは、誘引駆除剤の比較試験を行い、グリーンベイトが最も効果があることを報告した。誘引駆除剤では、葉を食べた個体だけが死に、卵等まで殺すことはできない。卵、幼貝、成貝すべてを殺すには、生石灰を撒くことが効果的である。しかしながら、生石灰は発熱によって、植

物を痛めるので、植木や宿根草などがある庭や畑では使用できない。誘引駆除剤を使う場合も、生石灰を使う場合も、一つの地域が一斉に行わないと、効果は少ない。

(5) オオクビキレガイの今後

福岡市では、2006年末から2007年初めにかけては暖冬で、オオクビキレガイは本格的な冬眠を行わなかった。地球温暖化が更に進行すれば、オオクビキレガイは我が国では1年中活動できることになる。個体数の増大と活動時間の長期化により、農作物の深刻な害虫となることが懸念される。

(6) さいごに

オオクビキレガイは、特定外来生物法の未判定種であり、今後とも情報を積極的に集めていく必要がある。分布、生態、その他気づいたことを大学博物館(〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1、TEL:092-642-4296、FAX:092-642-4299、E-mail:matukuma@museum.kyushu-u.ac.jp)までお知らせ下さい。

(九州大学総合研究博物館分析技術開発系)

この昆虫は何でしょう

松隈明彦



庭のイチヨウの葉にとまった、木の葉そっくりの昆虫を見つけました。隠蔽擬態では、インドから南東アジアへかけて分布するコノハチョウが有名ですが、この昆虫もなかなかの物です。アケビコノハという果実の汁を吸う害虫によく似ていると思ったのですが、北九州市いちのたび博物館の上田先生から、カレハガという別の科の蛾だと教えてもらいました。我が家の庭にはバラ科のモモ、ウメ、リンゴ、スモモなどがあり、幼虫の食草には事欠きません。成虫は年2回出現し北海道から九州、朝鮮半島、中国、極東ロシアに分布するそうです。

(2007年5月、福岡県糸島郡二丈町田中)

前回の連載(4)で、歴博年代論を支持する中国考古学者が主張する「弥生早期～中期前半を前8～3世紀に引き上げる」という主張が、いずれも未検証仮説であり、仮説に仮説を積み重ねたきわめて無理が多い議論であることを述べた。では、そのような論法を採らない場合には、どう考えられるのだろうか。細かい根拠は拙稿(「弥生時代開始年代再考—青銅器年代論から見た—」『九州大学総合研究博物館研究報告』第3号)をご参照ください。

遼寧式銅剣1式の年代は前9～前6世紀初頭の幅で考えられ、かりに朝鮮半島の「有段柄一式」石剣が遼寧式銅剣1式の模倣品だとしても、「有節柄式」・「有段柄二式」・「無段柄式」石剣の年代を遼寧式銅剣1式の年代幅に収める必要はなく、前6～前4世紀まで下げて考えてよい。したがって磨製石剣と土器との併行関係から見て朝鮮半島の欣岩里式の下限、先松菊里式、松菊里式土器もその幅となることから、日本列島の黒川式の下限、夜白I式～板付I式もほぼその幅に収まる。

朝鮮半島南半部に多く分布する形態的には古式だが法量が大きい遼寧式銅剣「V式」は、遼寧式銅剣「I」式とは時期差を認め前5～4世紀と押さえるべきであり、無理やり「I式」の年代まで引き上げることによって、併行関係にある「無段柄式」石剣や一段茎尖基式(柳葉形)石鏃の年代、ひいては先松菊里式から松菊里式土器期の実年代を遡上させることはできない。

朝鮮半島において、遼寧地域の遼寧式銅剣2式に近い遼寧式「II式」「III式」が出現するのは前5世紀であり、土器編年との対応関係から見て、III式の龍興里剣よりV式の松菊里剣が新しく、V式全体としては前5～4世紀と押さえられる。したがって、細形銅剣の成立は前4世紀に遡る可能性もあるが前

3世紀に降る蓋然性が強く、無文土器後期および板付II式の開始は前3世紀初頭以降である。

朝鮮半島で銅剣・銅矛・銅戈の3点セットが出現するのは、細形銅剣の成立より1段階下り、弥生前期末における列島への波及は、有耳の矛、複数節帯の矛、鋒が伸び始めた矛、有文で内が小さい銅戈が存在する点で、さらに1段階下ることになるから、細形銅剣の出現が前3世紀初頭に下る蓋然性が強いとすれば、弥生前期末の上限は前3世紀後半以降と押さえておくべきである。

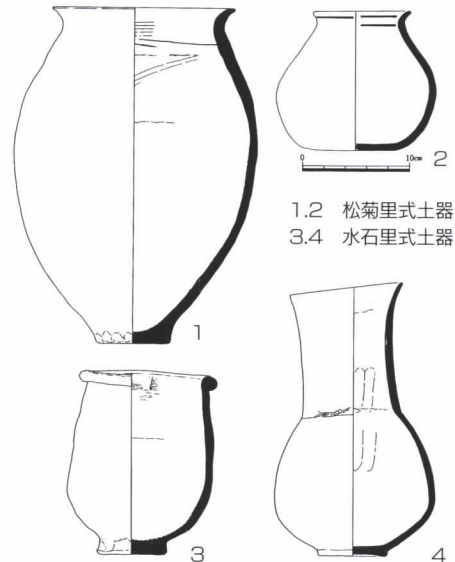
以上のような結論から、出土人骨を用いたAMS法の結果(田中・溝口・岩永・Higham 2004)を検討すると、歴博年代論に比してはるかに妥当であるものの、なお50～200年は古く出ており、依然として海洋リザーヴァー効果などによる年代の遡上を十分に補正できていないと考えられる。さらに内陸部出土人骨や、シカなどの草食動物骨を用いたAMS法の実施例を増やすとともに、より有効な海洋リザーヴァー効果補正法を開発することが急務となろう。

歴博年代論が発表されて以来、甕棺という土器から実年代の手掛かりが多い中国鏡などの遺物が出土し、日常的に弥生時代の実年代について考える習慣がある北部九州の研究者はともかくとして、主として関門海峡以東在住の学識も見識も十分な研究者たちが、いとも簡単に歴博年代論に乗ってしまった状況を見るに付け、弥生時代実年代について真剣に考えてきた人が意外なほど少ないこと、考古学者にとって、自分が関係した遺跡や研究対象の年代が古く遡るのを、望ましいこととしてほとんど無批判に受け容れてしまう誘惑に抗うのは困難であることを思い知らされた。今回はこの問題について述べよう。(以下次号)

(総合研究博物館一次資料研究系)

日	縄文土器		弥生土器							
	晩期		早期		前期			中期		
本	広田式	黒川式	夜白I式	夜白II式	板付I式	板付II式			城ノ越式	須玖I式
						a	b	c		
朝鮮半島	(突帯文)	漢沙里式	欣岩里式	可楽里式	先松菊里式	松菊里式	水石里式			勒島式
		早期					前期	中期	後期	
無文土器										

日本列島と朝鮮半島の土器編年の併行関係については諸説あるが、代表的な武末純一氏の見解を掲げておく。(武末純一2003「無文土器と弥生土器の併行関係からみた歴年代」『東アジアの古代文化』117)



1.2 松菊里式土器
3.4 水石里式土器

活動状況(展示・講演会関係)

特別展示

平成19年5月9日～6月8日

「九州大学教育・研究の最前線-第6回P&P研究成果一般公開-」を九州大学箱崎キャンパス50周年記念講堂にて開催しました。入場者数440名。

公開展示

平成19年7月21日～8月30日

平成19年度総合研究博物館公開展示として、福岡市立少年科学文化会館・九州大学総合研究博物館合同企画展「ドキドキわくわく化石のヒミツ-化石が語る地球の環境-」を福岡市立少年科学文化会館1階学習室で開催しました。入場者数23,098名。



サテライト展示

●福岡空港 第1ターミナル2階待合室

平成19年3月12日～8月8日

倭人伝の道と北部九州の古代文化III

平成19年8月9日～

倭人伝の道と北部九州の古代文化IV

●前原市伊都文化会館

平成19年5月10日～7月28日

川の生命 -うなぎ仔魚の長い旅-

平成19年7月29日～9月21日

とる・つくる・そだてる -東シナ海の魚-

平成19年9月22日～

とる・つくる・そだてる -資源の保護と管理-

●福岡市保健環境研究所「まもる一む福岡」

平成18年6月7日～平成19年6月18日

植物をもっと知ろうII

平成19年6月19日～

植物をもっと知ろうIII

●志摩町総合保健福祉センター「ふれあい」

平成19年5月10日～7月28日

海の生命 -海の生命を守ろう-

平成19年7月29日～9月21日

川の生命 -ワンド-

平成19年9月22日～

川の生命 -田で生活する生物-

●二丈町健康ふれあい施設「二丈温泉きららの湯」

平成19年5月10日～7月28日

マリンバイオ -小さな生き物-

平成19年7月29日～9月21日

マリンバイオ -遺伝子って何だろう-

平成19年9月22日～

海の生命 -九州近海に見られる温暖化-

P&P 関連セミナー

「九州大学博物館展示を利用した実践的研究」

～アウトリーチ活動のあり方と、大人と子どもの関わりを促すツール開発～

●第1回セミナー(平成19年7月6日)

●第2回セミナー(平成19年8月31日)

全国大学博物館等協議会 2007 年大会

平成19年6月7日～8日

九州大学が主管校となり、第10回全国大学博物館等協議会及び、第2回博物科学会が、箱崎キャンパス五十周年記念講堂及び21世紀交流プラザを会場として開催されました。参加者31団体、74名。

活動状況(その他)

新規寄贈標本資料

平成19年3月26日

上宮健吉様よりハエ目キモグリバエ科昆虫標本(約2万点)の寄贈を受けました。

貴重な資料をご寄贈いただいた寄贈者の方々に厚く御礼申し上げます。

運営委員会

平成19年3月22日(書面会議)、平成19年5月17日

職員の異動

○多田内新館長が着任: 嵩洪前館長の定年退職にともない、後任に農学研究院の多田内修教授が館長に選ばれました。任期は平成19年4月1日から平成21年3月31日までです。

○小島弘昭助教が、東京農業大学農学部准教授となって転出しました。後任の助教を、現在選考中です。

九州大学総合研究博物館ニュース

The Kyushu University Museum News

No.9, October 2007

発行:九州大学総合研究博物館 〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1

TEL & FAX 092-642-4252 ホームページ <http://www.museum.kyushu-u.ac.jp>

印刷:城島印刷株式会社 〒810-0012 福岡市中央区白金2-9-6 TEL092-531-7102 FAX092-524-4411